

「牛乳や食堂」のラーメンを2年間で80杯ほど味わい教頭2年目が終わった。

さて問題は教頭3年目だった。私の中では、「いったい何をしようか」という具合であった。すると、幸運なことに初任者が入ってきたのである。普通の教頭なら、初任者をどちらかというと嫌がる人が多いかと思うが、私の場合は大歓迎だった。なぜなら、初任者研修を通して自分も勉強できると思ったのである。「よかった。やることができた」と思ったほどであった。

初任者を指導するには、まず自分が勉強をしなければならない。初任者研修のプログラムにはすべてのことが網羅されているので、自分のブラッシュアップには最適だった。当該初任者も単身赴任だったので、よく二人で夕飯を食べにいった。南会津町田島は、南会津の中心地である。合同庁舎もある。意外と食事ができる場所はある。この初任者は、県教育センターの研修に来たり、研修がない年でも必ず福島に来たりして、今でも私と食事をしている。そこでは、彼からの近況報告と彼の今後の展望について協議されるわけである。これもいい出会いだと思う。

それでも満ち足りない教頭3年目の私は、遂に暴挙に出ることになる。5月上旬に「教師海外研修」というパンフレットが学校に届いた。「これだ」と思った。夏休みに10日間ほど発展途上国に赴き、研修をしていくというものだった。研修というのは、現地に行き、帰ってきてから報告書を提出して終わりというものではない。行く前に、授業実践構想を立て、現地では授業実践に必要なものを収集し、帰ってから授業実践をする。そして、その成果を報告会で発表するというものであった。

授業実践をする、夏休みのお盆後半からの10日間、そして場所がモンゴルということが決め手となった。教頭である私は免外で技術科と家庭科を担当していた。モンゴルでの研修が家庭科の授業に生かせると考えたのである。内容は「衣食住」の学習である。衣と食と住の面からモンゴルと日本を比較していくという授業構想である。また、時期も最高だった。一番学校に迷惑がかからない期間だった。加えてモンゴルという場所がよかった。これが、アフリカならば行こうとは思わなかったことであろう。

とはいえ、自分は教頭である。夏休みだといっても10日間も日本にいなくなるわけである。さすがに校長先生にお願いするかどうか逡巡する日々が続いた。そして、出した結論は、「やらないよりはやって後悔したほうがよい」だった。内心は、校長先生に「だめです。認めません」と言っただけという思いがあった。そうすれば、あきらめがつく。意を決して校長室に向かった。おそるおそる校長先生に話してみた。すると、校長先生から「いいんじゃないですか」という予想外の言葉があった。

校長先生のご厚意と職員のご協力に甘え、無事にモンゴル共和国での研修を終えることができた。お陰様で私の拙い家庭科の授業も新たな展開を見せ、少しは充実したものになったかもしれない。教頭としては、やってはいけないこととはわかっていながらも行動してしまった私なのである。しかし、得るものが大きかったことも事実である。決してお勧めできる教頭の姿ではないが。

(次号に続く)